尹紫遠日記を読む
――戦後日本で在日朝鮮人が書くということ

宋　恵媛（大阪経済法科大学 アジア太平洋研究センター）

キーワード：日記、在日朝鮮人、在日朝鮮人文学、検閲、密航、移動

はじめに

> 東京は、けふ雨が降ってゐる。このノートとペン等を上野で買って戻りはずぶぬれにぬれた。焼の原の雑草は遠く霞んでゐて昔の東京の面影を忍ばせる。ひとり部屋にすわってゐる。悄然として！軒を打つ雨滴れの音がまるで瀧の様にきこえる。言ひ知れぬ旅愁が静かにも強く心を壓す。果て知らぬ砂漠を行く人間の心はこんなものかも知れない。君はその後一体どうしてゐるのだ？君のことを思ふと眞に胸がサケ（マ）相（マ）で寐らぬ夜が多い。どうか元気でゐて下さい。必ず好い時も来るだらう。これから僕のその后の経過を逐次知らせます。（1946.9.14）

これは、尹紫遠（ユンジャウォン）（1911. 6.11－1964.9.5）がつづった日記[1]の、第一日目に書かれた文章である。1946年9月14日という始まりの日付には、どのような意味があるのか。雨のはげしく降る日に、「果て知らぬ砂漠を行く人間の心」に自らの心境を重ねているのはなぜなのか。そして、どこにいるかも分からない「君」とは誰なのか。

尹紫遠日記は、1946年9月14日から1964年8月25日までの期間に断続的に書かれた、九冊の日記帳と二冊の小さなメモ帳からなる。日記からは、生涯、貧困や体の不調と格闘しながら机に向かい続けた、朝鮮人男性作家の姿が浮かび上がる。だが、その名を知る者はほとんどいないだろう。国立国会図書館のウェブサイトで検索すると、小説作品としてヒットするのは、朝鮮戦争のさなかに単行本化された『三十八度線』（1950年）の他は、「長安寺」（『文芸首都』、1954年1月）、「朴根太の話」（『新日本文学』、1956年7月）、「密航者の群」（『コリア評論』、1960年3～8月）の3件のみである[2]。しかも、「密航者の群」は掲載誌の廃刊により、4回で連載が中断している。

尹紫遠の名で刊行された唯一の著書である『三十八度線』は、1945年11月に北朝鮮から南朝鮮へと38度線を越えていく人々の物語である。朝鮮戦争を直接扱った作品ではないが、この戦争についての情報が限定されていた当時の日本で、時宜を得て刊行に至ったものと推測される。だがこの小説よりも、1953年と1954年に創元社と岩波書店から再刊された、金素雲訳編『朝鮮詩集』の解説執筆者としての方が、通りがいいかもしれない。あるいは、本名である尹徳祚（ユントクチョ）の名で1942年に刊行した、「言葉に圀境を有つ一無名半島人が、我圀で最初に著した和歌集」[3]である『月陰山』の著者であること

---

(1)　尹紫遠氏の長男である尹泰玄氏に日記と写真の閲覧許可をいただいた。貴重な資料を提供して下さったことに、感謝の意を表する。

(2)　小説以外では、金素雲訳編『朝鮮詩集』再刊時の解説二種類、劇作家の三好十郎追悼文集への寄稿一編、随筆二編がヒットする。ただ、国会図書館に所蔵のない、在日朝鮮人発行の新聞や雑誌から掲載が確認できる作品（「密航者の群」の続きもその一つ）も何点かある。尹紫遠日記を手がかりに再調査したところ、さらに新たな作品も見つかった。文学作品の全容については、稿を改めて論じたい。

の方が目を引くだろうか。

尹紫遠は韓国併合の翌年の1911年に朝鮮・蔚山（ウルサン）南方の江陽（ソダン）里で生まれた。その地で書堂〔漢籍誦読や習字を学ぶ私塾〕と、朝鮮総督府による1911年の朝鮮教育令により書堂に取って代わった普通学校に通った。一四歳の時、横浜で洋服業を営む長兄を頼って単身日本に渡る。1924年、朝鮮人虐殺が起きた関東大震災の翌年の初夏のことである。両親の死により兄はまもなく朝鮮へ戻り、尹紫遠は一七歳で東京に出る。日本では学校教育は受けられず、牛乳配達と新聞配達の合間に読書をしたり、独学したりした[(4)]。「「感じ易い」少年期を、私は、軽蔑、圧迫、排他、恐怖といった様な社会的な雰囲気の中に、失意と貧苦にまみれて味気なく送った様である。然しそれでも、上京と共に中学二年位な程度の頭で早大の文学講義録を取りよせたり、哲學書や社会学方面の本などを持ち歩いたりした」[(5)]。クリーニング工場で働いていた1936年、日本人の友人に誘われて山脇一人が主宰する短歌会に参加し、会誌『杜鵑花』に投稿を始める。そして1942年に歌集『月陰山』を刊行する。同書の刊行を勧めた四歳年長の金素雲――尹と同じく少年期に日本へ渡り、ほぼ独学した――の他、劇作家の三好十郎や秋田雨雀との交流は、この頃から始まったようである。

植民地期や植民地以後を生きた二〇世紀の朝鮮人たちの日記についての研究は、主として歴史学の分野で蓄積されてきた[(6)]。日本（語）文学研究においても、近現代以降の日本語による日記の研究が近年積み上げられている[(7)]。そのような中にあって、日本敗戦／朝鮮解放（以下「解放」と略記）後の在日朝鮮人が書いた日記についての研究は、ほぼ手付かずのままにある。なぜか。その最大の原因は、閲覧可能な日記が見つからないことだろう。1958年に刊行されベストセラーとなった安本末子『にあんちゃん: 十歳の少女の日記』を例外として、在日朝鮮人が書いた日記が公刊されたことはほぼなかったし[(8)]、在日朝鮮人の書いた日記を収集、保存、継承するための持続的な取り組みもなされてこなかった。そのための人的な資源も、それを支える財源も充分でなかったことが、その背景にある。

このような事情から、在日朝鮮人と日記の関係を俯瞰することは困難である。たとえば、「解放」初期の日記人口を知る手がかりもない。ただ、日本人のそれよりはるかに少なかったということだけは、確実に言える。なぜなら、この時期の在日朝鮮人の識字率[(9)]、とくに女性のそれ[(10)]が圧倒的に低かったからである。

西川裕子は、近代以降の日本で日記を書くと

(3) 山脇一人「序」（『月陰山』河北書房、1942 年）、8 頁

(4) 尹徳祚「巻末記」（『月陰山』）、7 頁

(5) 同上

(6) 鄭昞旭「植民地農村青年と在日朝鮮人社会―慶尚南道咸安郡、周氏の日記（1933）の検討―」（鄭昞旭、板垣竜太編『日記が語る近代：韓国・日本・ドイツの共同研究（同志社コリア研究叢書一）』同志社コリア研究センター、2014 年）、板垣竜太「故郷の夢―在京都朝鮮人留学生日記（1940 ～ 43 年）にみる植民地経験―」（同上）、太田修「朝鮮解放直後におけるある労働者の日常―仁川の電気工 I 氏の日記から―」（同）、太田修「朝鮮戦争下のある労働者の生活」（板垣竜太、鄭昞旭編『日記からみた東アジアの冷戦（同志社コリア研究叢書三）』同志社コリア研究センター、2017）等。

(7) 西川祐子『日記をつづるということ：国民教育装置とその逸脱』吉川弘文館、2009 年、田中祐介編『日記文化から近代日本を問う：人々はいかに書き、書かされ、書き遺してきたか』笠間書院、2017 年等。

(8) 宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集　一九四五～八四』（緑陰書房、2014 年）第一巻に、1963 年前後に書かれた在日朝鮮人女性たちの日記 6 編が収録されている。これは、在日本朝鮮人総聯合会（総連）の機関紙『朝鮮新報』（朝鮮文）に設置された「私の日記帳より」という欄に掲載されたものである。当時は、朝鮮民主主義人民共和国への「帰国」が始まり、在日女性たちの朝鮮語学習熱が最高潮に達していた。「共和国公民」として自己規律化するための手段として、この頃には朝鮮語で日記をつけることが特に女性たちに奨励されていた。

(9) たとえば、李殷直の短編「暴風の前夜」（『朝鮮文藝』1948 年 11 月号）では、朝鮮人学校の教師が次のように話す場面がある。「日本の国民は、義務教育を受けているから新聞を読めます。われわれの場合、新聞を読む者の数は、全体の二割にもなりませんからね」（4 － 5 頁）。

いう行為を「国民教育装置とその逸脱」(11) という観点から分析した。これに倣えば、朝鮮人が日本敗戦後に日本語でつけた尹紫遠日記は、まぎれもなく「その逸脱」の側にある。ただし、朝鮮語であれ日本語であれ文字習得自体が叶わなかった大部分の朝鮮女性たちを考えれば、「国民教育装置」の完全なる外部にあったとは言えないだろう。

尹紫遠は少なくとも1937年、26歳の時点ですでに日記をつけていたとみられるが (12)、たとえば1936年の日本では、20以上の出版社から、概算で300種類以上の多様な層を対象にした日記帳が発売されていたという (13)。尹紫遠は日本の学校教育は受けていないが、日本人たちに囲まれて暮らす中で日記をつけることを習慣化したとみられる。

尹紫遠日記は、GHQ／SCAP占領期を含む日本敗戦後／朝鮮「解放」後の在日朝鮮人の生活史がたどれる貴重な一次資料であるということの他にも、いくつもの興味深い特徴を持つ。まず、この日記が、尹紫遠の文学世界の全容を解き明かすための大きな手がかりとなること。次に、日記の書き手が、「解放」直後に朝鮮と日本間の移動を経験しており、かつそれを小説化した唯一の在日朝鮮人作家だということ。さらには、金達寿や金素雲をはじめ、「解放」初期の在日朝鮮人文化、文学運動を担った有名無名の人物たちが軒並み登場すること (14)。日記に刻まれた日本人の妻との関係を手がかりに、在日朝鮮人史や戦後日本史を民族とジェンダーという観点から考察し直すことも可能だろう。

本稿では、尹紫遠日記を読み解くために、まず作家・尹紫遠を在日朝鮮人文学の文脈の中で位置づける。その上で、敗戦後日本での生活と創作活動の軌跡を日記から辿っていく。その後、尹紫遠文学の中心テーマである「移動」について、日記と作品を対照させながら論じる。最後に、この日記を「検閲」という観点から検討していきたい。

なお本稿では、日記中の旧字体、当て字、誤字、脱字等もすべて原文のまま引用し、分かりにくい語句については「ママ」のルビを付した。

1. 在日朝鮮人作家としての尹紫遠の位置

植民地出身者が、日本の伝統的な文学形式である短歌を巧みに詠む。これは、朝鮮の詩を翻訳らしからぬ滑らかな日本語に置き換えてみせた金素雲が、それによって惜しみない称賛を勝ち得たのと似て、日本人読者たちの優越感を充足させたことだろう (15)。だが、『月陰山』に収められた懐かしい兄弟との朝鮮での再会や、疲弊していく朝鮮の風景が淡々と写し取られた短歌からは、支配者に飼い慣らされることのない強情さを湛えた作者の像が浮かび上がる。日本の支配への抵抗が込められているようには見えないが、憐憫の情を誘ったり日本に阿ったりすることもない。歌集からうかがえるこのような

(10) 1934 年の大阪府学務部社会課「在阪朝鮮人の生活状態」によれば、10,593 人の成人朝鮮女性のうち、学校教育を受けたことが全くない女性は、95.32 パーセントにあたる 10,097 人であった。また、「解放」当初の在日朝鮮女性団体でのスローガンには、「一人が十人の文盲 (ママ) をなくそう」というものがあった。朝鮮語を読める女性が、それぞれ 10 人の非識字の女性を教えようという識字運動である。

(11) 西川祐子前掲書

(12) 1952 年の日記には、「十五年前の日記」という短編を構想したことが記されている (1952.9.16)。

(13) 田中祐介「研究視座としての「日記文化」—史料・モノ・行為の三点を軸として—」(田中祐介編『日記文化から近代日本を問う: 人々はいかに書き、書かされ、書き遺してきたか』笠間書院、2017 年)、20 頁

(14) 朝鮮植民地期に日本で活動した、著名なテノール歌手で、「解放」後は朝連系列の文化運動の中心人物の一人となった金永吉(永田絃次郎)、プロレタリア文学運動に参加した李北満や金熙明、崔承喜と並んで活躍した舞踊家の趙沢元らの他、「解放」後の在日文学運動や出版活動を担った李殷直、金元基、李贄義、康玹哲、姜舜、朴元俊、許南麒、高成浩、黄命東等。

(15) 山脇一人は、「内に向っては怠惰な歌壇人の眠を覚まし、外に對してはこの歌集を機縁として、朝鮮満洲の人たちは素より、大東亜共榮圏に住む人人の間に少しでも我が短歌が普及してゆくよすがとならうことを切に希念して歇まないものである」(「序」、10 頁) と、植民地出身者による日本文化普及への貢献として、この歌集を位置づけている。

作者の性格は、小説「密航者の群」で描かれた、作者の分身とみられる景俊（キョンジュン）のそれとも一致する。以下の引用は、1930年代後半、居住する東京で「徴用令状」を受け取り、朝鮮へ逃げることを決めた景俊を描写した場面である。

> 〔前略〕景俊に、朝鮮の独立運動にとび込むだけのしっかりした思想のあるはずがなかった。〔中略〕じっさいの彼は、将来に何の希望もなかった。彼の生きてゆくべき現実の社会は、朝鮮人であることをいわおのようにのしかかって拒否した。しかし彼はどうしても「皇国臣民」になりたくはなかった。彼としては、いさぎよし、とえらべる道は自殺だった。だが、人間はそう易々と死ねるものではない。彼は一種のたましいの放浪者のように生きていた。その彼に、絶対的なもののひとつは、その肉体は地上のどこにくち果てようとも、自分のたましいは朝鮮にかえるんだ、という民族感情だった（「密航者の群」第２回）。

独立運動の先頭に立つような闘士ではないが、帝国日本への屈服は断固拒否する。このような尹紫遠の「民族感情」は、1919年の三・一独立運動記念日に対する思い入れにも表れている。尹紫遠日記には、3月1日に書かれた日記が5年分あるが、全て三・一運動に言及されている[16]。一方、1945年8月15日が朝鮮解放の日であるとは、さほど意識していなかったようである。日記には、この「解放」の日に関する記述は一切ない。8月15日前後に書かれた日記は2年分あるが、そこでも何も記されていない。

朝鮮人であることを決して手放さずに、ひたすら朝鮮と朝鮮人を日本語で刻むという『月陰山』に見られる創作態度は、「解放」後にも引き継がれた。朝鮮半島が米ソ冷戦対立の最前線に立たされると、在日朝鮮人社会も当初は右と左、その後は南と北に分かれ激しい政治イデオロギー対立を繰り広げた。そのような中で尹紫遠は、南北いずれの国家に対しても支持を表明することなく、ひたすら朝鮮人の運命を小説として書き続けた。植民地期のように短歌が詠まれることは一度もなかった。驚くべきことに、日記にも一言の言及もない。

尹紫遠は当初、反米、反李承晩路線を取った在日本朝鮮人連盟（朝連）に集まった、金達寿、金元基、李殷直といった作家たちと近かった。1947年には、これらの人々が結成した在日朝鮮文学者会の責任者に推されもした。だが、「反封建的、反ファシズムの立場を条件にして、自由主義から共産主義に至るあらゆる進歩的な文学者の結集」[17] を掲げ、1948年1月に在日朝鮮文学会が結成されると、在日朝鮮人たちによる文学運動の中心から外れた。

新たに結成された在日朝鮮文学会では、脱植民地化の実践としての朝鮮語による創作が叫ばれたが、尹紫遠はこうした動きに同調することはなかった。金達寿と九歳の年齢差があったように、当時の主要な在日作家たちよりもずっと年長だった尹紫遠にとって、朝鮮語で新たに創作を始めるのが簡単なことではなかったこともその一因と考えられる。だが、朝鮮語を取り戻し、民族文学運動に身を投じるという発想自体が、そもそも尹紫遠にはなかったようだ。日記を書き始めた当初、尹紫遠はなんと英語を新たに学ぼうとしていた。

異なるイデオロギーを持つ作家たちの大同団結を期して結成された在日朝鮮文学会だったが、その後朝鮮半島情勢が緊迫の度を強めていくと、結局は南北の国家のいずれかを選択せざるを得なくなっていった。朝鮮戦争休戦後、在

(16) 日記の該当箇所は次のようなものである。「三、一革命記念日。ひとり黙想。友皆無を感ず」（1951.3.1）、「三、一革命記念日、終日「行商人」加筆」（1953.3.1）。「三、一記念日。電車賃がなくて出られず。「密航船」をかきつぐ」（1955.3.1）、「実に気持よく晴れわたった日だ。きょうは三、一記念日だ」（1956.3.1）、「三、一記念行事が例年のように方々で行われたのであろう。小林少年が退院のすぐあと、髙橋という二十七の肋膜の患者が入院」（1961.3.1. なお、尹紫遠はこの時入院中だった）。

(17)「後記」『우리문학（私たちの文学）』創刊号、1948 年 8 月

日朝鮮文学会は朝鮮民主主義人民共和国の文学界へと接続し、在日朝鮮人の書き手たちは朝鮮語で創作することを強く要請されるようになっていく。尹紫遠は、在日朝鮮文学会の中核を担った朝連－在日朝鮮統一民主戦線（民戦）－在日本朝鮮人総聯合会（総連）周辺の作家たちともつかず離れずの関係を保っていたが、一貫して日本語で書き、日本の媒体での発表を目指した。尹紫遠日記からは、1950年代以降の尹紫遠が、『新潮』、『群像』、『文藝』など日本の商業文芸誌への作品掲載を切望していたことがわかる[18]。しかし、その希望は結局一度も叶えられなかった。

2. 日記の形式と言語の変遷

尹紫遠日記は当初、「君」に宛てて書かれた。「君に手紙を書く日は極って雨が降る。雨が降るのでなく雨が降るから手紙を書く気になるのだらか」(1946.9.27)。居場所の分からない「君」への手紙と並行して、日記帳には尹紫遠が朝鮮の家族や友人に実際に送った手紙を書き写した文面がしばらく続く。だが、日記をつけ始めて約一か月経つ頃には、自らを読者として書く一般的なそれへと日記のスタイルは変化する。この日記は、作品の構想や進捗状況、作品掲載の依頼先などを記録する創作ノート、日々の記録、備忘録、雑記帳を兼ねていた。その内容は、困窮した生活や仕事について、その日の出来事と会った人物について、家庭生活、借金の借り先と金額、質入れした品物と金額、読んだ本や見た映画、新聞記事のスクラップ、自分が書き送った手紙の写し等である。時事問題が書き留められることもあるが、それに対する考察などが書かれることはあまりなかった。酒に酔った勢いに任せて日々の不満や鬱憤を書きつけることもあり[19]、それが後に妻との間に亀裂を走らせる原因ともなった。

書き始めてしばらくはまめに日記をつけていたが、後には数か月や数年単位で書かれなかった時期もある。一年単位で欠けている日記のうち、1948年、1950年、1954年分については、前後の日記の記述から判断すると、日記をつけていなかったのではなく、日記帳の紛失か、後日の廃棄の可能性が高い。クリーニング店を構えた1957年以後には、仕事に忙殺されていたようで、日記をつける頻度は明らかに減っていった。この頃には作品執筆もほとんど行っていない。

日記帳として使用されたのは、当初は横書きの大学ノートだった。その後、1953年から1957年にかけては縦書きの旺文社版「学生日記」が使用され、それ以降はまた横書きの大学ノートに戻っている。二冊残されたメモ帳の一冊は、1960年に妻が家出したときのもの、もう一冊は1964年に尹紫遠が入院した際のものである。

以下は、「学生日記」を初めて購入した日の日記全文である。イタリアで開催された国際ペンクラブ大会の帰りに東京に立ち寄った金素雲と久しぶりに再会してから[20]、一か月ほど経った頃のことである。

> 素雲氏の部屋をさがしてみたが、思わしいところなし。この「學生日記」はどこへ行っても売れきれなので、新丸子でまで買いに行った。祐天寺から大師範[21]、都立高校まで書店をしらみつぶしあるきつゝ。いよいよ今晩から「行商人」にかる。(1953.1.6)

(18) 尹紫遠の作品を実際に掲載したのは、『文芸首都』、『新日本文学』、『社会文藝』、『総評』などだった。在日朝鮮人発行の『国際タイムス』、『統一評論』、『コリア評論』などにも何編か掲載された。民団とも総連とも距離を置いた、朝鮮建国促進青年同盟や朝鮮民主統一同志会の中核を担った、第三極の人々が携わった媒体である。

(19)「彼は充分考えた結果を書くのではなく、まったくそのときどきの感情にアルコールが燃え移ってゴシゴシ書きなぐるのだった。だから二、三日もすればけろりと忘れてしまうと同時に、自分でも判読に苦しむ字がノートを走りまくっているのだった。(「密航者の群」第 17 回)

(20) 日本の新聞に韓国事情を否定的に語ったことが舌禍事件となり、金素雲はその後、駐日韓国代表部に旅券を没収され、1965 年頃まで日本に滞留した。

(21) 第一師範駅、現在の学芸大学駅のこととみられる。

「学生日記」は、日記欄以外に、日本や世界の思想家や学者の言葉やコラム、幅広い学問分野の基礎知識などが豊富に盛り込まれた日記帳である。1954年には、物理学者の湯川秀樹もこの日記帳を使用していた[22]。1頁に二日分が割り当てられた〔1956年からは1頁に一日分となった〕この日記には、多くても一日に100から150字程度しか書けない。実際に、尹紫遠がこの日記を使用した期間には、大学ノートを使用していた頃のような長文の記述は姿を消している。一方、1959年から1961年にかけて使用された大学ノートは、劇作家で尹紫遠の尊敬する友人だった押川昌一が、尹紫遠の長男に与えたものである。それ以後、長文の日記も再び書かれるようになった。

尹紫遠日記の大半は日本語で書かれた。だが、初めの年に漢文と英語がそれぞれ数か所出てくるほか[23]、1953年までは朝鮮語も時折、使用された。日記が書かれた総日数は約1,000日に上るが、そのうち朝鮮語が使われたのはわずかに12日分のみである。朝鮮の家族を思い出した日、朝鮮舞踊を鑑賞した日など、主に故郷や家族に思いを巡らせるときに朝鮮語が使われた。ただし、それらは朝鮮語の助詞、名詞、動詞などが部分的に混じるという程度で、一文すべてが朝鮮語で書かれることはほとんどなかった。日本語の音をそのままハングルに置き換えたものや、方言、誤字も多く含まれる。朝鮮で過ごした1910年代後半から1920年代前半にかけての間に、尹紫遠は学校で漢文、朝鮮語、そして日本語を少々習ったとみられるが、その後、朝鮮語での読み書きからは遠ざかったようだ。1956年の日記には、「朝鮮語ではハガキ一枚書けない。なさけない話だ」(1956.2.15) と書きつけられている。

一方、尹紫遠の日本語には、単なる誤字や抜け字なのか、間違って覚えた日本語なのかが判然としない箇所が散見される。四十二日ぶりを「四十二日ふり」と書くといった、朝鮮語話者に特徴的な濁点の脱落もときどき見られる。

3. 日記からたどる生活と文学

尹紫遠日記の書き出しは雨への言及から始まっている。その後の日記でも、雨の日に書かれた日記には彼が置かれた状況を象徴的に表すものが多い。東京にやってきた当初は、雨具を買うお金がなくて外に出かけられず(1946.9.23)、家庭を持ってからは部屋の雨漏りを心配し (1955.2.28)、臨時手伝い先のクリーニング店の客足が雨で遠のき、生活難に陥る(1955.3.28)、といった具合である。1957年にクリーニング店を開店した時も、「雨ばかりで全くよわる　四月以来はじめて仕事らしい仕事をする」(1957.7.2) と、雨に悩まされている。それは、尹紫遠の生活が天候に左右されるような不安定なものであったからに他ならない。その一方で雨は、尹紫遠に家で日記や作品を書く時間と、妻に向き合う余裕をもたらす。「きようも雨。終日机に向う。とし子のからだ極度に疲労。ぼくたち夫婦はお互いにさびしい境遇だ。いたわり合わなければならない。普(ママ)の夫婦の何倍も」(1956.3.31)。

35歳で東京に再びやって来た尹紫遠は、米も味噌も炭もない極貧生活の中、労働の合間を縫って作品を書き続けた。「原稿料で充分な生活の出来る作家が日本中に30人そこそことは心細い話である」(1957.1.8)。日本人作家であっても、筆一本で生計を立てるのが難しいことは、尹紫遠も重々承知だったことだろう。貧乏作家というのも、敗戦後間もない日本ではそう珍しくもなかったかもしれない。だが、日記に記録された尹紫遠の歩みからは、朝鮮人であるが故の苦難がくっきりと浮かび上がる。

日記帳を購入した翌々日、尹紫遠は朝鮮国際タイムス社[24]に行き、入社の希望を伝える。

(22) 石倉徹也記者「湯川博士の「転換点」裏付け　ビキニ事件関連の日記公開」『朝日新聞デジタル』2018 年 5 月 11 日付(https://www.asahi.com/articles/ASL585T5ML58PLBJ00C.html　2020 年 9 月 16 日確認)

(23) 漢文と英文は 1946 年にのみ見られる。漢文は、中国明代末期の洪自誠『菜根譚』の一節を書き写したものであり、英文は英語学校に通っていた短い時期に、合計 2 文が書かれたのみである。

在日朝鮮人が戦後新しく興した同社の編集方針は、「朝鮮独立と日本民主化への貢献」、「日本と朝鮮両民族の提携と協調」、「在日朝鮮人の指導啓蒙と日本人の既成概念の払拭」で、日本人と在日朝鮮人を読者に想定していた。1946年には56人のスタッフを抱え、10万部の用紙割り当て分はいつも売り切れた。「東京における一般的なニュースを扱った唯一の夕刊紙であり、日本人に人気があった」という[25]。

> 朝九時に家を出て、虎の門の朝鮮國際タイムス社에[26]行き、社長の許雲龍氏並びに編輯局長、高成浩氏と會った。入社を迫ったけれども同紙は未だ日刊になってないので今の所毎日出社しても、それほどの仕事もないのだから、一ヶ月分の生活費を出すから、むしろ家にゐて、何か文化方面の原稿を書いて呉れないか、といふことだった。そして後一ヶ月もすれば同紙は日刊になるからその時こそ毎日出社してほしいとも付加へた。無論僕は喜んで引受けた。さうして原稿紙千枚ばかもらって来た。(1946.9.16)

この日記の二週間後から、『国際タイムス』に尹紫遠の評論や随筆が掲載されはじめた[27]。だが、尹紫遠は入社を思いとどまり、代わりに同紙の売り子となることを決断する。この頃に弟に宛てた手紙が、日記帳に書き写されている。

> 社長も編輯局長も正式入社をすゝめてくれたが、僕の方から辞退した。その代僕は新聞賣になる。今日、その第一歩を踏みだした。上野の駅頭で。日本のばあさんを一人使って。けふの儲三十二円余り。だんだん馳れるに従って日に七八十円の収入の見込。では何時故正式に入社せず新聞賣になるか？理由はかんたんだ。つまり入社すれば、どうしても頭や体をしばられる。だから自らの好き勝手なことか出来ない。それに来十月三から日本英学院に入学して、みっち勉強をしようといふ予定もあるのだ。少なくとも朝鮮の詩を英訳出来る位になりたいのが、僕の念願だ。今後恐らく十年は掛るだらう。行ける所まで行ってみるつもりだ。そしてひまがあれば好きな原稿でも書きたい。さういふ訳で新聞賣り〔に〕なった。(1946.9.29)

10年かけて英語を習得し、朝鮮の詩を英訳したい。時間の余裕がある時には原稿も書きたい。「自らの好き勝手なこと」ができるだろうという自信を持って、新聞社への入社を蹴ってまで選んだ駅頭での新聞売りの仕事だったが、初日で躓いてしまう。

> 新聞賣は実に忙しい。それが賣れて忙しければ有難いが、即賣組合に入ってゐないものだから、國際タイムス以の新聞は全然手に入れることが出来ないのだ。賣行のすごいのは「東京新聞」だ。朝日、毎日、讀賣、いはゆる三大新聞は殊にかへない。組合員は一部二十二銭五厘で賣って二十五銭で賣る訳だ。所で僕は組合員ぢゃないから定價とほり二十五銭で買って三十銭か二十五銭で賣るのだから利益はほとんどない。それに疲れること甚だしい。若し君が一緒だったらどんなに樂しく生き生きした気持で仕事ができるだらう！（1946.9.30）

即売組合の組合員にならなかったのが、組合費が払えなかったからなのか、それとも朝鮮人

(24) 朝鮮国際タイムス社については、小林聡明『在日朝鮮人のメディア空間―GHQ 占領期における新聞発行とそのダイナミズム』（風響社、2007 年）、34 － 41 頁を参照。
(25) 同上、39 頁
(26) 助詞の「へ」
(27)『国際タイムス』に尹徳祚の名で掲載された作品は、「焼け跡」（詩）、「こんなこともあった」（随筆）、「防犯ポスター私見」（随筆）、「朝鮮民謡について」（評論）、「秋田雨雀先生」（随筆）、「虎と干柿」（民話）など。

には組合員になる資格がなかったからなのかについては記されていない。いずれにせよ、わずか一週間ほどで売り子の仕事をやめ、今度は国際タイムス社の「検閲係」として「月俸貳百七拾圓円」で編集局に就職する（1946.10.11）[28]。

> 辞令をもらふ。全く辞令をもらふのは生れて始めてである。毎日検閲、南鮮の労働者武装蜂起“ボツ”、北満に朝鮮人聯合民主軍、中共軍と連絡編成“保留”（1946.10.22）

「検閲係」の仕事の詳細については、これ以上は日記で触れられていない[29]。なお、占領期に朝鮮関連の記事で主な検閲対象となったのは、朝鮮分割占領や信託統治に関連した米ソ批判、朝鮮の民族主義的宣伝、新朝鮮建設に関するものだった。米軍のもう一つの占領地である南朝鮮で起きていた反米、反李承晩の動きを報じることも厳禁だった。『国際タイムス』は、1947年初めには民間検閲局により「極右」と分類されていたが、しだいに『解放新聞』や『民青時報』など、共産主義的傾向を持つとみなされた朝連系列の出版物とともに、検閲処分を数多く受けるようになっていく。

国際タイムス社での仕事が軌道に乗った11月、尹紫遠は英語学校への入学を果たす。だが、「英語勉強しようとしながらも、創作慾故に専念出来ず。後の悔ひ思ひ知れども…」（1946.11.16）、と創作したいという気持ちが勝り早々と英語習得をあきらめたようだ。

1947年1月には、金達寿や張斗植ら同胞の新進作家たちと出会い、意気投合している。金達寿は前年10月の新日本文学会第二回大会で、同会の中央常任委員に選出されていた。

> 十四日に横須賀へ。二泊。達壽、斗植兄に逢って実に愉快の極。二十四、十五日両夜達壽兄と同床。文学者こん談会をやること、“民主朝鮮”六月号から“海王舘”[30]を連載することを引受けた。いよいよ本腰になって文学をやる時が来た。勉強、書く、考へる。噫！いよいよ多忙になって来た。この上は女房さへゐたなら…。（1947.2.17）

給料が一部しか支払われなかったり、文化部長ではなく、校閲部長に任命されて気落ちしたりと問題はあったが、新聞社での定職を持ち、同胞たちの発行する雑誌で小説を連載する話も決まり、貧しくはあれ意気軒高である。この約二週間後、尹紫遠が責任者となり金達寿、李殷直、康玹哲、張斗植、金元基とともに在日本朝鮮文学者会を結成した。同年10月、同会のメンバーが中心となって日本語文芸誌『朝鮮文藝』[31]が創刊される。その創刊号に尹紫遠は短編「嵐」を寄稿し、はじめての原稿料を得ている。「解放」直後に日本から帰還した炭鉱労働者とその家族が直面した、南朝鮮での悲惨な現実を描いた作品である。「「嵐」の原稿料、1,200,00這入る。生れて正式の原稿料はこれが始めてなり」（1947.8.19）。金銭的に余裕ができ、国際タイムス社編集局の机の上で寝泊まりする生活からようやく抜け出し、自分の部屋を借りたのは、この頃のことだった。

1948年の尹紫遠の動向は、日記が欠けているため辿ることができない。この年には、済州島四・三事件（4月）、占領軍と日本政府による朝

(28) 日記での言及はないが、尹紫遠自身、『民主朝鮮』1947年8月号に掲載された随筆「朝鮮民謡について」が検閲に引っ掛っている。ただし、当時の検閲レポート（プランゲ文庫所蔵）を見ても、具体的な検閲対象箇所は示されていない。

(29) この少し後の日記では、「いやな仕事なり」と言いながら、毎日横浜に通っていることが記されている（1946.12.12）。東京にあった民間検閲局へ、事前検閲のためにゲラを持って日参していたわけではなさそうであるが、具体的な仕事内容は不明。

(30) この小説は何らかの事情で『民主朝鮮』には発表されなかった。また別の日の日記には、「金素雲と私」が同誌に掲載される予定だとも記されているが（1947.2.1）、こちらも実際には掲載されていない。金素雲が「親日派」、つまり対日協力者とみなされ同誌から却下された可能性も考えられる。なお、金素雲が来日して初めて民団東京本部の人々と会った日、尹紫遠は「素雲氏、非國民、万一を思い紫遠同行す。このところ微妙なり」（1952.12.13）、と護衛に赴いている。

(31)『朝鮮文藝』は朝連傘下の朝鮮文藝社発行で、発行部数は2,000部だった。

鮮人学校弾圧に端を発した阪神地域での民族教育闘争事件（4月）、国連監視下で行われた南朝鮮のみでの単独選挙実施（5月）、大韓民国政府樹立（8月）、朝鮮民主主義人民共和国政府樹立（9月）と、朝鮮人たちのその後の運命を決する大事件が立て続けに起きていた。

1949年の日記を開くと、尹紫遠は出社することもなく自宅で窮乏生活を送っている。その事情がうかがえるような記述は日記からは見出せないが、もう朝鮮国際タイムス社では働いていない。1948年11月に日本政府による新聞購読調整が行われており、新興紙の多くは経営難に陥っていた。朝鮮国際タイムス社も、1948年12月23日付で休刊届を出し、1949年1月7日に『東京日日新聞』と合併していた[32]。『国際タイムス』は、1948年後半には民間検閲局より「北朝鮮に好意的」と判断されていた[33]。この頃の事情は、後日書かれた作品「うぶごえ」で次のように説明されている。「ぜぜひひ主義だったこの“日報世界”〔国際タイムスとみられる〕は、容共的とみなされ、用紙割り当てなどにもたえず巧妙な手かげんが加えられ、とうとう五年目につぶれた」[34]。「うぶごえ」の記述が事実に基づいたものだとすれば、朝鮮国際タイムス社が消滅したのは1950年ということになる。国際タイムス社が「容共」へと突然変質したというよりも、朝鮮分断に反対し、自主的な統一政府の樹立を唱えた同社が、ソ連への敵対政策を推し進めていったGHQ／SCAPにとって取り締まるべき対象と映るようになったということだろう。

尹紫遠は同年4月に日本人女性のとし子と結婚する。朝鮮人男性との結婚は、妻の親戚たちには歓迎されなかったようである。結婚式の一週間前の日記は次のようなものである。「とし子、石神井の叔父、叔母の所へ結婚の許可を得に行ったと。見事反對。理由、朝鮮人は盗癖あり、然かもそれは國民性なり、と。それに朝鮮人は口が上手い（ママ）くて人をよくだます。故にむしろ、印度人と結婚すべし、と言ったそうな」（1949.3.25）。朝鮮人と日本人間の国際結婚は、当時の在日朝鮮人の間でもその難しさがしばしば指摘されていたが[35]、貧困がそれに追い打ちをかけることになる。

結婚後、尹紫遠は自らが執行委員の一人となった在日朝鮮文学会で働き始める。同会は、尹紫遠が責任者を務めた朝鮮文学者会の他、白民社、新人文学会など、いくつかの在日朝鮮作家団体が大同団結し、1948年初めに結成された[36]。尹紫遠はそこで会報作りを行ったり、その会報や「文化年鑑」〔朴三文編『在日本朝鮮文化年鑑』〕を売るために、各同胞団体を回ったりしている。だが、「収入まるでなし。〔中略〕金、金、金、ミカン箱が茶タンスになり、結婚記念寫眞も未だ取れず」（1949.4.26）という有様だった。妻の出産予定日が迫るなか、尹紫遠は必死で職探しを続ける。

> 警官約七百名が共産党本部を襲撃、アカハタ用紙ヤミの名を借りて（八月一日）　朝八時半に金順■朝連大田支部長を訪い、兼ねて就職のことをきく。常任委員会を開いてから返事すると言う。喰べる物全くなし。とし子三日病む。十一時に新吞界新聞社の宋正宇君に逢って就職をたのむ。〔中略〕全く就職難。金容太の奥さんに逢うために ―クリーニング屋をやるつもり、パンパンのドレスなど― 二時以上も待った〔中略〕。妙

(32)『在日朝鮮人のメディア空間―GHQ 占領期における新聞発行とそのダイナミズム』、40 頁

(33) 同上

(34) 尹紫遠「うぶごえ」『鶏林』第 5 号、27 頁。

(35) 康苑「国際結婚をした同胞たちへ」（『解放新聞』1953 年 4 月 14 日）、一読者「享楽的態度を排撃する―国際結婚についての私の疑問」（『朝鮮民報』1957 年 5 月 2 日）等。

(36) 同会結成直前の 1947 年末に、在日朝鮮文学者会の内部で、李殷直と意見の相違があったようである。「京橋朝鮮聯东京支部に於いて、文学者〔会〕あり。李殷直と小議論、朝鮮文学に就いて。中途で歸る。最早尹紫遠などの出る幕にあらず。文化部長をやっている時とはまるでちがう。夜、不快、七時半から东京まで唯行って来る」（1947.12.20）

に、いや堪らなく淋しい。おれのような人間は生きる價値がないようだ。反動も進歩もない。どうにか暮らしの立つ仕事がほしい。それにおれは実に無能力者だ。(1949.8.2)

結局、尹紫遠は朝連、新世界新聞社といういずれの同胞組織にも就職できなかった。上記の日記が書かれた翌月の1949年9月8日、朝連は団体等規正令第四条によって強制解散させられた[37]。また、『新世界新聞』(日本文、朝鮮文)を刊行した新世界新聞社[38]は、政治的立場をめぐって以前から内紛を繰り返していたが、まもなく廃刊となったとみられる。同胞組織で仕事を得ることが難しいと知るや、尹紫遠は「パンパン」の服を洗濯する仕事を思いつく。戦後日本における絶対権力者である占領軍兵士、彼らを相手に性を売る日本女性、その彼女たちに寄生せざるを得ない在日朝鮮人。まさに当時の日本社会の縮図である。

朝連解散の事実やその感想は日記には記されていない[39]。尹紫遠がこの日に日記に書いたのは、『文芸首都』を主宰する保高徳蔵に小説「三十八度線」の雑誌掲載の仲介を頼む、以下のような手紙だった。

〔前略〕第一発表の可能性かあるのでしょうか？卒直に申上げまして、朝鮮人の書いたものを、そうおいそれと引受けてくれるところはないと思いますか、「しかし先生のスイセンなら」というよりどころだけにすがりついている有様です。そうして出来れば十一月の初旬頃に御金も少々ほしいのです。実は現在三丈の間で身動きがとれないで参っているのに、女房の御産の予定日が十一月八日です。ですからそれまで、せめて四丈半位のところに移りたいと思いまして毎日肉体労働をやってをりますが、部屋は愚か、御産の費用が出るかどうか、すこぶるあやしいものです。〔後略〕(1949.9.8)

すでに在日朝鮮人団体には、文学作品の原稿料を出すような余裕はなかったことだろう。さりとて日本の文芸誌には、朝鮮人の書いた作品の需要はない。そこで尹紫遠は、植民地期から張赫宙、金史良、金達寿らの創作活動を支援してきた、この良心的な日本人作家に「すがりつ」いた[40]。しかし、それもうまくいかない。

新橋の神本さんへ仕事に行く。夕方かえりに千円かりた。借金のこと、生活のこと、前途のことを考えると、暗い絶望的な気持ちになる。貧亡も限度がある。斯う毎日追われてばかりいたのでは、文學も芸術もない。死という問題をこの頃考え続ける。しかしやっぱり死んでは駄目だと思う。そのそばから又死のことを考えたりする。夜、桑玄を銭湯に連れて行く。余り気を使うので汗が流れるやら、眼鏡が外れかかるやら、歩く一歩一歩に全神経を進中した。万一倒れてはと。我がなるものを始めて湯に入れてみた。湯に入れた時の桑玄の顔は実に素晴らしい。親馬鹿かな。(1949.12.3)

妻の苗字でクリーニング店の名刺を作り、旧

(37) この日についての日記での記述はないが、この時の様子は作品で次のように描写されている。「〔前略〕朝連の解散はあたかもばらゝになったくさりのように日本に居る朝鮮人たちの生活状態を完全な根無し草にした。俊吉はずっと朝連の組織外にいて批判的な眼を朝連に向けていたのだが、解散になってみると彼は組織の力というものを痛切に感じた」(「人工栄養」第1回、『総評』1954年5月7日)。

(38)『新世界新聞』(日本語版、朝鮮語版)は、1946年創刊の朝鮮語紙『朝鮮新報』を、1948年7月に改題した新聞。

(39) 朝連解散の翌日、尹紫遠は友人とともに皇居前に行っていたようである。「於東京宮城前　一九四九．九．九．」と裏書された尹紫遠所蔵の写真には、スーツを着てネクタイを締めた尹紫遠が納まっている。

(40) 尹紫遠は保高徳蔵の他にも、中野重治、西野辰吉、小松清、古山登、押川昌一、武井昭夫、金素雲、金達寿などの作家に原稿を郵送したり、家まで持参したりしながら、商業文芸誌への掲載や単行本化を頼んで回っていた。返信がなかなか来ないと、そのたびに原稿をいつ返してくれるか気をもむ様子が、日記の随所に記されている。

知の同業者の「スケ」〔期間限定の手伝い〕に行ったりもしているが、それでは長男が生まれ三人に増えた家族の生活は立ち行かない。そこで、11月末から再生品のストッキングの行商を始める。これも「パンパン」を相手にした商売であるが、不首尾に終わる。「夕方四時半から新宿のカフェー街へクツ下売りに行ったがだめ。行商人、だめ。生活者としては何をやってもゼロ」(1949.12.9)。その後も、『民主朝鮮』印刷用とみられる「ざら紙」を新橋に売りに歩いたり、飴売りの仕事を始めようとしたりしている(1949.12.26)。

朝鮮戦争勃発(6月)の年であり、単行本『三十八度線』刊行(11月)の年である1950年分の日記は欠けており、日記はその翌年1951年へと飛ぶ。『三十八度線』の印税などの言及は見当たらず、生活は相変わらず困窮したままである。尹紫遠はクリーニング店の「スケ」と、妻の洋裁で辛うじて生計を立てている。3月には日本社会党機関紙『社会文藝』から生まれて初めての原稿依頼を受け、短編「密告者」を寄稿した。その後、原稿料を催促する手紙を同誌宛てに書き送っているが、実際に原稿料が支払われたかどうかは不明である。

編集者に「东洋の物は一般に売れない」と言われながら、金素雲の『朝鮮童謡選』と『朝鮮民謡選』の「重版」を岩波書店に依頼したのも、この頃のことである(1951.3.27)。この時、尹紫遠は切手を買う金がなく、朝鮮の家族に手紙を出すこともできない状態に陥っていた。その後尹紫遠は、河出書房の「市民文庫」として『金素雲訳詩集』を刊行することにし、作品の選定とあとがきを担当している[41]。

1952年に入ると少し生活が安定したようだが、今度は労働と創作の間で板挟みになる。

> なんというわびしさだろう?一三日から毎日五〇〇円ずつ貯金をしている。家を建てるためだ。だがたのしさなどまるでわかない。時々たまらなくわびしくなる。家を建てた時はおれの肉体はしなびてしまうのではないか?同様に俺の創作慾もすっかり枯れてしまうのではないか?そう思うとたまらなくさびしく、わびしくなる。せめて自分の注目をひいた社会的事件位書きとめておく位の肉体の疲労からのがれたい。メーデ(ママ)の日、各大學事件、破防法など。休戦會議の成り行きなど―。あゝ!つかれる。〔中略〕わずかながらも貯金は出来るし、子供たちは無事にそだちつゝあり、家庭はむしろエンマンだ。充分幸福である筈なのに、おれの心はますますさびしく、なるばかりだ。(1952.5.17)

だが、この半年後に尹紫遠は再び仕事を失った。家を建てることもなかったようである。こうして、連日夜遅くまで洋裁をしていた妻が外に仕事に出かけるようになる。以下は、1952年末の日記である。

> 十月二十三日より失業。さんたんたり。米も無し、炭もなし。ボツボツ質やに消えてゆく。やっぱり働いていないと創作など出来るものではない。とし子が子供たちをおんぶして保育園につれて行って、その歸りにつとめ先により夕方五時半までの仕事をし、それから子供たちをつれてかえる。しかしいくらにもならぬ。素雲氏印度洋より絵葉書くる。来る九日横浜入港のラ・マルセーズ号で。(1952.12.3)

日本に到着した金素雲の世話に奔走しながら、1953年1月末からは、金達寿に誘われて移動放送のセールスマンになっている。以下は、ＮＨＫのテレビ本放送が始まった三日後の日記である。

> 午前七時半に出る。蛇の目ミシンの宣傳のため、移動放送のカーで八王子市をまわった。〔中略〕ひかり[42]一個が買えない。吸が

(41) 最終的には、金素雲訳編『朝鮮詩集』として創元社と岩波書店から刊行された。

らほぐして新聞紙に巻いて吸う。こんな思いをしてまで文學をやるのか？腹の底から妙な笑いがこみ上ってくる。(1953.2.4)

この仕事も長くは続かず、すぐにクリーニング店での仕事に戻った。長女が産まれ、家族がさらに増えた狭い部屋では創作に集中できず、短編「長安寺」の仕上げは「〔家の周辺の〕騒音をさけて新丸子の橋の下でやった」(1953.8.26) ほどだった。1955年には、目黒区の自宅からそう遠くない中根町に、創作のための部屋を別に借りている。この頃の状況は、「金、金、金、金、今の生活状態で月に四千円もかかる部屋を借りて作品を書くなど苦しい。しかしこうでもしなければ作品は書けない。その原稿がいつうれることやら」(1955.2.24)、「全くひどい天候だ。親子四人でカユをすする。貧乏にもあきあきした。ほんとうに能なしか？とし子もへとへとにつかれた。ひき上げるべきか？それとも賣れる見込のない原稿をここ（中根町）で書きつづけるべきか？」(1955.4.3) といったものだった。なお、1955年の日記帳に書き込まれた予定表からは、尹紫遠が二つのクリーニング店を掛け持ちし、日曜以外のほぼ毎日働きに行っていたことが分かる。

「人に使われるのがいやになった」(1955.4.27) と中根町の部屋を引払い、生活費のための仕事に比重を移すことを決めるのは、この約三週間後のことだった。その二年後の1957年4月、尹紫遠は自らのクリーニング店を構えた。その仕事に忙殺されたためであろう、それ以後、日記はあまり書かれなくなっていく。1959年に一日分だけ書かれた日記には、金達寿と文芸評論家の小田切秀雄に手紙を書き送ったことが記されている。ただし、これは文芸誌の紹介ではなく、クリーニング店の得意先を紹介してほしいという内容だった (1959.1.26)。自営業も順調にはいかなかったようである。

「密航者の群」連載第一回分〔1955年脱稿の「密航船」を改題した作品とみられる〕が掲載された『コリア評論』が郵送されてきたのをきっかけに、尹紫遠は1960年3月から日記を再びつけ始める。だがこの年の日記は、日記帳に6日分と、妻の家出中のことが小さなメモ帳に4日にわたって書かれたのみだった。次に日記が再開されるのは、1961年1月末である。このとき尹紫遠は、脳溢血で倒れ入院していた。思いがけない休息を得て、病院で嬉々として「密航者の群」の続きを書き進めている様子が、創作と同時進行で書かれた日記からうかがえる。「原稿が終って、はじめて入院患者ら(ママ)く(ママ)、よく寝る」(1961.3.16)、このように尹紫遠が記したのは、入院してから一か月が過ぎた時であった。退院日に書かれた日記を最後に、この年はあと一日分しか書かれなかった。その一日分とは、妻が再び家出したことを記したものである。

その二年後、押川昌一からの手紙をきかっけに再び日記がつけ始められる。九冊目、最後の日記帳である。1923年9月の関東大震災時に、日本人たちによる朝鮮人虐殺の現場にいた在日朝鮮人男性に話を聞きに行ったこと、その証言を元にすぐに短編「憲兵の靴」を書き出したことが、そこには記されている。「原稿を書き出すと、いつものことながら書いたあと、眠れなくて困る。身体もひじょうに弱っているようだ。午前一時から三時半すぎまで書いてねる。朝は七時に起き商賣（仕上やせんたく、配達）をしなければならない」(1963.11.20)。

九冊目の日記帳の最後には、「密航者の群」の出版を知人に依頼したことが記されている (1964.7.5)。その十日後、尹紫遠は病に倒れ入院した。このとき、小さなメモ帳が病院に持ち込まれた。そこに書かれた日記によれば、尹紫遠はこの時も創作に意欲を燃やし、小説「朝鮮戦争と私」に着手した。だが、41枚まで書いたところで容体が悪化し、日記をつけるだけでやっとになっていく。以下は、この世を去る二週間前に書かれた日記である。

熱は七度に下がったがいつまた上るか、ま

(42) ひかり〔光〕はタバコの銘柄名。

ったくひやひやする。何だかこのまま死んでしまうような気もするし、また生られそうな気もする。いずれにしても原稿が書けないのが残念でたまらない。今日も降りそうだ。四十二日ぶりの雨だそうだ（1964.8.21）

順風満帆に見えた、敗戦後日本における尹紫遠の生活と文学は、三年も経たずに暗礁に乗り上げた。日本が朝鮮戦争特需を足がかりに繁栄していくなか、尹紫遠は社会の片隅へと追いやられていったのだった。植民地期と変わることのない生活をしながら、最期まで創作に情熱を傾けた尹紫遠の作品も、その多くは日の目を見ることなく埋もれていった。

4. 移動を描いた作品、日記における移動の不在

では、敗戦後の日本で尹紫遠はいったい何を書こうとしたのだろうか。尹紫遠日記を通読すると、彼が貧困の中で書き続けた作品の多くが、自らや周囲の朝鮮人たちの移動を写し取っていたことが分かる。『三十八度線』は1945年秋の北朝鮮から南朝鮮への移動を、「嵐」や「朴根太の話」は1945年後半の日本から南朝鮮への帰還を、そして「密航者の群」は、1946年夏の朝鮮から日本への「密航」を描いた作品である。そしてその移動の経験は、個人のそれとしてではなく、つねに家族の物語、民族の物語として描かれた。

日記を読み進めていくと、冒頭の「君」が誰なのかしだいに明らかになってくる。自らの年若い朝鮮人の妻である。尹紫遠はこの最初の妻と、「解放」後に二度の移動をともに行っていたようである。日本敗戦の数年前、二人は北朝鮮の兼二浦〔現在の朝鮮民主主義人民共和国黄海北道松林市〕へ渡ったとみられる。日記には、二か所それを示唆する記述がある。「終戦当時の兼二浦」という作品の執筆計画（1946.12.6）と、妻と兼二浦にいた時分の言及（1949.6.26）である。「終戦当時の兼二浦」を改題したとみられる「国境」を脱稿した日、尹紫遠は次のように記している。「映画「情炎」を見て妻のこと思い出した。自分の妻に對した無情な無理解がしのばれた。随分泣いた」（1947.5.1）。「国境」は現在探し出すことができないが、作品名と執筆された時期から判断すると、1950年刊の『三十八度線』の原型となった作品とみられる。『三十八度線』の内容は、日本製鐵が経営する兼二浦製鐵所で働いていた南朝鮮出身の人々が、日本敗戦の混沌の中、米ソ両軍が対峙する分割占領線を1945年11月に南下し、苦労しながら故郷を目指すというものである。尹紫遠が「解放」後はじめて書いたと目されるこの小説は、彼が妻と三十八度線を越えてわずか一年あまり、東京で日記をつけ始めて三か月の時点で着手されたものだったということになる。

その最初の妻に対し、日記の中の尹紫遠は後ろ暗さと悔恨の情を抱いている。その妻の消息が分かるのは、約一年後のことである。朝鮮から訪ねてきた弟・六徳によって二つの悪い知らせがもたらされたこの日を、尹紫遠は「生涯に於いて最も記念すべき日」（1947.9.26）と日記の欄外に記した。一つ目の知らせは、現在妻は朝鮮にいるが、尹紫遠が「見切りをつけられ」たこと、もう一つは、長兄が釜山府立病院に入院中で、「全然見込なし」の状態にあることである。その約1月後、朝鮮に住む別の兄からの手紙で長兄の死が伝えられる。ここから、日記を書き始めたとき、尹紫遠が朝鮮から日本へと「密航」してきたばかりだったこと、そしてその「密航」の過程で悲惨な生き別れを経験していたことが分かる。

日記自体には、自らの「密航」について触れた箇所も、「密航」という言葉も一つも見つからない。しかし、最初の妻についての日記の記述や、1955年1月に「密航船」という題で尹紫遠が着手した作品と、それを発展させたと思しき「密航者の群」の内容からみて、尹紫遠自身が密航を経験したことは疑い得ない。1946年7、8月の二か月間に連合国軍に検挙された朝鮮人の数は、17,570人に上っているが[43]、尹紫遠や家族たちもその数のうちに入っているとみられる。

「解放」直後に先を争うようにして日本から

朝鮮へ引揚げた朝鮮人たちが、日本へと逆流した背景を、尹紫遠は小説で「朝鮮の社会実相は混乱の頂点だった。引揚者たちは途方にくれた。どうもがいて見ても生きるメドの立たぬひとは命がけで密航する」(「密航者の群」第1回)と記している。尹紫遠が体験したであろう出来事の一端を示すため、以下に同作品の概略を紹介したい。1946年6月下旬、主人公の景俊とその妻を含む30人あまりを載せた密航船が蔚山を出発し、日本を目指した。船が山口県沖に上陸する直前、周辺の住民からなる警防団員たちに通報され、「進駐軍」に捕らえられる。武装した「進駐軍」兵士が監視する密航者専用の列車に乗せられ、一行は下関駅に向かう。下車後、水上警察署まで徒歩で移動させられるが、そこで密航者の間でコレラ患者が発生する。その後、関釜連絡船の待合室に移された人々は、別の地区から移送された「密航者」たちと合流する。950人ほどに膨れ上がった待合室で、再びコレラの感染が広がる。今度は全員が仙崎へと列車で運ばれる。朝鮮へ送還されると騙されて五隻の米軍用船に分乗した後、仙崎沖に停泊したまま一か月半以上、海上で隔離される。船がまもなく佐世保に移動する[44]という話を聞きつけた景俊は、妻を別の人物に託し、夜の海を泳いで岸にたどり着く。

尹紫遠は「解放」後まもなくの間に、自らの生命を危険に晒し、まだ若かった兄を亡くした。最初の妻の消息をもたらした弟も、その数年後に「獄死」している[45]。『月陰山』刊行の契機となったような兄弟揃っての再会は、「解放」後には果たせなかった。「朝鮮の兄弟姉妹たちに切に逢いたく思う。早く日韓國交のなることを祈るばかり」(1957.1.26)。だが、両国間での国交樹立は尹紫遠の逝去の翌年である1965年、自由な往来が可能になるのはそのさらに先のことだった。ただし、たとえ尹紫遠の生前に「日韓國交がな」ったとしても、故郷訪問とひきかえに韓国政府から要求される朝鮮籍から韓国籍への変更――韓国という国家への帰属を強いる、政治的な意味合いを含んでいた――に、尹紫遠が応じたかは分からない。

東京での生活を再び始めた尹紫遠は、その直前までの自らの、家族の、そして民族の移動の経験を記録することに「創作慾」を燃やすようになっていった。『月陰山』に収められた短歌の数々が、10数年ぶりの朝鮮への帰郷という出来事がなければ書かれなかったように、尹紫遠日記も、そしてその後の創作物も、尹紫遠が1946年夏に朝鮮から仙崎の岸に到達しなければ書かれることはなかったものだったのである。

おわりに――二つの「検閲」

> 「出まかせはもうよして下さい。わたしはあなたの日記をみました」「日記？」「わたしはだらしの無い女です。不潔な女です」「……」「半年もまえ、わるいと思いながら、あなたのその日記をよんだとき－」〔中略〕それでも彼女は、その日記をみるまでは、生きる希望を夫に賭けていた。夫のゆく道ならどんなところにもついて行こうと思っていた。だが、彼女のうけた打撃は大きかった。時が経つにつれて、その一字一句が彼女の

(43) 森田芳夫『数字が語る在日韓国・朝鮮人の歴史』(明石書店、1996 年)、21 頁。なお同書、同頁によれば、1946 年 4 月から 12 月までの間に、日本警察に検挙された「密航者」数は 17,733 人に上った。

(44) 佐世保引揚援護局針尾収容所内には、「不法入国」者用の収容所が設置されていた。

(45) 尹紫遠日記には、彼の弟が「解放」後に日本と朝鮮を何度も行き来している様子が記されている。1949 年末、尹紫遠は朝鮮からやってきた弟の妻から、弟が鎮海から馬山の刑務所へ移されたと聞く。1953 年初めに弟の妻に東京で再会した日、尹紫遠は日記に次のように書いた。「彼女らが去ったあと、今さらのように六德のことをいろゝ思い出した。弟よ！安らかにねむれ。お前の獄死は決して無駄ではなかった。お前のたましいの上に新しい朝鮮が生れるであろう」(1953.1.8)。この記述からは、弟が反米、反李承晩闘争に関わり、命を落としたことがうかがえる。また尹泰玄氏は、この叔父が朝鮮戦争で捕虜になり、処刑されたと聞いているという。なお、尹紫遠所蔵の写真の中には、尹紫遠とその弟、それに後に総連初代議長となる韓徳銖の三人が納まっている一枚がある。日本共産党が運営する朝鮮人活動家養成機関である、三一政治学院の前で撮影されたものである。

生きる道に立ちふさがった。(「密航者の群」第18回)

尹紫遠日記は、宛先を失ったまま宙に浮いている彼の作品を復元するための、重要な手がかりである。それは、尹紫遠の作品の多くが自伝的なものであったことを裏付ける証拠物でもある。自身の経験を複数の登場人物に分散して負わせたり、他人の経験と自らの経験を混ぜ合わせて一人の登場人物に仮託したり、という操作が創作過程で行われたことも、この日記は教えてくれる。

日記からは、自らの日本での経験を、朝鮮での出来事に置き換えて描くという、現実と虚構における場所の入れ替えが行われていることも分かる。上に引用した「密航者の群」の一節はその一例である。作中の朝鮮人女性「彼女」は、自分を罵る言葉が書き連ねられた夫の日記を読み、それ以上、夫との生活を続ける自信を失う。それはまさに、尹紫遠日記をめぐって起きた出来事であった。尹紫遠日記を構成する、小さなメモ帳のうちの一冊である1960年分の日記は、妻の家出中に書かれたものである。その家出の原因となったのが、この尹紫遠日記だったのである(46)。

しかし、尹紫遠日記が今も残されているのは、この妻とし子の意思によるものに他ならない。酩酊状態で書かれたものだったとしても、自らのことが悪しざまに書かれ、夫婦関係を危機に陥れる原因となったこれらの日記を、妻は尹紫遠が53歳でこの世を去った後も保管しつづけた。そして、『月陰山』、『三十八度線』という二冊の著書とともに長男に手渡された。家族にとって尹紫遠の第三の「著書」であるその日記帳には、労働や家事、育児で疲れ切った体で、尹紫遠が書き上げた原稿の校正や清書の作業を行う、「共著者」である妻／母の姿もまた刻まれている。尹泰玄氏によれば、父の形見の中には作品の原稿は一つもなかったという。それらは文壇に顔の利く編集者や作家たちに預けられたまま、そのうち忘れられていったのだろう。

創作に関するメモの他は、毎日の出来事とそれに対する簡単な感想が、あまり練られていない文章で書かれているこの日記は、一見すると、他人に読まれることが想定されていなかったようにみえる。この日記をめぐる妻との騒動からは、尹紫遠が妻に日記を読まれること、すなわち家庭内での「検閲」を考慮していなかったことは明らかだろう。

だが、日記の中で触れられていないことに着目すると、逆に、尹紫遠が他人に読まれることを強く意識して、少なくとも1950年代前半までは「自己検閲」しながら書いていた可能性が浮上する。彼が一番に想定した検閲者は、朝鮮人の出入国と在留を管理する占領当局および日本政府当局であろう。前述のように、彼自身が「密航者」であることをうかがわせるような記述は、日記には一度も記されていない。また、朝鮮国際タイムス社での「検閲係」の仕事自体の詳細、米軍占領下の南朝鮮についての見解(47)も、日記からは探しだせない。尹紫遠日記は、その持ち主の「不法入国」の証拠物となることも、南朝鮮／韓国への強制送還の口実となる反占領、反政府活動の証拠物になることも、絶対に避けなければならないという条件下で書かれたのではなかったのだろうか。これは、1948年と1950年という、在日朝鮮人にとって決定的に重要な年の日記帳が欠けていることの説明にもなるかもしれない。「密航者の群」には、戦前の東京で、景俊が特高警察による家宅捜査を受ける場面が出てくるが、これは当時の朝鮮人知識人たちにとっては当たり前の日常であった。それを知る尹紫遠が、相変わらず朝鮮人が厳しい取締まりの対象となる戦後日本で、官憲の目を意識しなかったはずはないだろう。彼が「密航」の事実を背負っていたなら尚更である。

(46) この日記は、作品の領域にも浸透していった。尹紫遠はこのメモ帳の内容を、翌年に書いた「密航者の群」の続きで流用している。

(47) 最初の妻の故郷である大邱は、1946年10月に大邱十月事件が起きた場所である。これは、南朝鮮全土に広がった米占領軍への抗議運動の端緒となった事件である。尹紫遠日記ではこの事件についても、「大邱に戎厳令の敷かれ朝鮮も今は大変でありませう。生活の安定が先づ第一です」(1946.10.11)と簡潔に触れているのみである。

東京にやって来た尹紫遠は、「密航」ではなく、最初の妻との北朝鮮から南朝鮮への移動を作品のテーマに選んだ。その主題を選ぶとき、尹紫遠は自身に危険が降りかかることがないかを、まず考えたのではなかっただろうか。1950年末の『三十八度線』刊行時にも、尹紫遠は細心の注意を払ったことだろう。その後、1951年2月、尹紫遠は朝鮮戦争さなかの韓国を舞台にした短編「密告者」に着手する。書き上げた原稿の感想を、『三十八度線』の序文を執筆した三好十郎から受け取った日の日記は、このようなものであった。「夕刻、三好先生より速達来る。「密告者」先生にパスする。作家として大部成長したと言われた。本質的には左翼とも言われた。ケンエツのことも考慮して書くように言われた」(1951.3.1)。GHQの民間検閲局による日本国内の新聞、雑誌等出版物の検閲は1949年10月に廃止されたが、在日朝鮮人たちの動向やその出版物は、1952年まで民政局(GS)の監視、収集、分析の対象だったのである。

尹紫遠が自らの「密航」を主題にした小説「密航船」に着手したのは、サンフランシスコ条約発効による占領軍撤退から二年以上が経過した、1954年末のことであった。「「密航船」半枚書く。今年になって始めてだ。どうも恐しく気分の乗り移らない奴だ」(1955.1.11)。このようにして書き始めた同作は「密航者の群」へと発展し、尹紫遠が完成させた最後の長編小説となった。

日本敗戦後からまもない時期に在日朝鮮人が書いた、ある程度まとまった文章に接することはひじょうに難しい。その背景には、当時の在日朝鮮人の識字率の低さや劣悪な生活環境、社会の多数者である日本人の需要がなく、書かれたものが活字化される機会が極端に少なかったこと等、様々な要因が絡み合っている。そのなかで、尹紫遠日記が在日朝鮮人史にとってばかりでなく、近現代日本史にとってもごく貴重で稀少なエゴ・ドキュメントであることは論を俟たない。この日記はまた、日本の文芸誌には「おいそれと引き受けて」もらえず、日本の文学システムの頂点に位置する文壇に到達できずに消えていった、彼の数々の作品の存在を刻んでいるという点で、朝鮮人が戦後日本で文学作品を書き、発表することの不可能性を照らし出してもいる。その意味で尹紫遠日記は、在日朝鮮人が戦後日本で書くこととはどういうことかをめぐる、約20年にわたる長い証言ともなっているのである。

＊本論文はJSPS科研費20K00533の助成を受けたものである。